巡見街道と地図

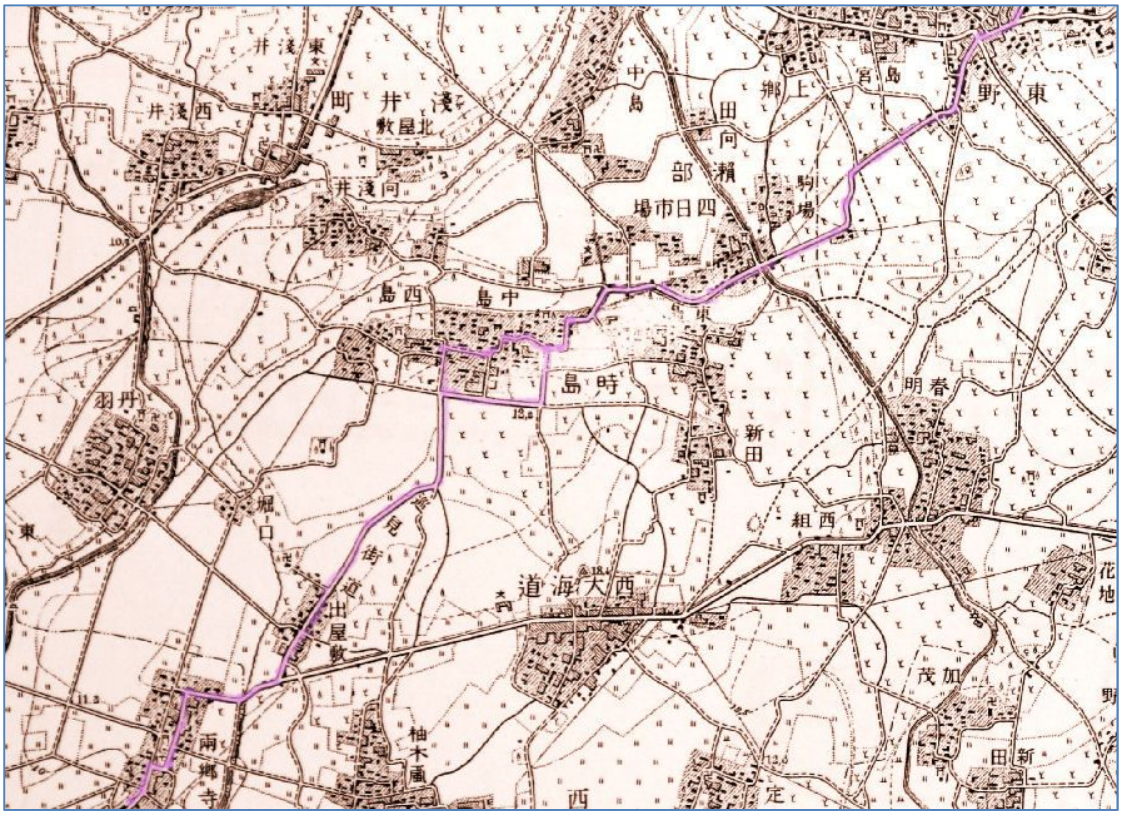
熊澤良嗣　調

下は昭和４年発行の地図の「巡見街道」に紫で色づけしたものである。西成連区の前身である「西成村」は昭和１５年に一宮市に合併したが、西成村当時の地図（愛知縣西成村全圖）では、巡見街道の部分は「縣道一宮犬山線」と記名されている。

「若年あれこれ」の中の「若年区記念事業顕彰記念碑」の項によれば、縣道一宮犬山線は昭和６年改修となっており、この地図に現在の県道６４号（一宮犬山線）が見られないのは当然であるといえよう。

なお、現在の県道６４号の江南市島宮には「巡見街道」のプレートが出ているが、この巡見街道が当時から犬山と一宮を結んでいたことの名残である。

時之島地内では諸説あるようだが、ここでは現在も道路が残っている２通りのルートを示した。また上記「若年あれこれ」の「出屋敷」の項にあるように、昭和６年以前は今の若年は出屋敷と呼ばれていたから、この地図では「出屋敷」となっている。



下は現在の Google 地図で、県道６４と瀬部の「巡見」という小字名部分を示したものである。（点線で囲まれた部分。）紫で色づけしてあるのが昔の巡見街道の道筋である。

山口周一氏の「若年今昔記」や、櫻井芳昭氏（春日井市郷土史研究会）の「尾張の街道と村」などを参照すると、巡見街道の幅員は大体６～９尺（１.８～２.７メートル）であった。正使１名と副使２名のお駕籠の脇に、ご下問に対応するため村人が付いて歩くのだからそれくらいの幅は必要だったのであろう。

参考までに、上掲の著作の中で櫻井氏は道幅について、東海道が３.５間、美濃路が３間、木曽街道や岩倉街道２.５間だったと記している。巡見街道はこれらよりもマイナーな道であったが、犬山と一宮を結ぶ大切な交通路であった。なお、農道は３尺が普通であった。

左は櫻井氏の許可を得て掲載する「尾張国の巡見街道」の図面である。御三家の地元である名古屋は遠慮して、その周辺を５日かけて巡見している。

当地区では、犬山を朝出発して飛保の曼陀羅寺で昼休憩、その後萩原まで進んで宿泊となっている。総勢百名前後だったとされており、当時の人たちの健脚ぶりがうかがわれる。

なお、巡見使が下す評価は「美政・中美政・中悪政・悪政」などの文言が使われたという。